

(2011年11月11日講演)

2. 教育基本理念の検討

尚美学園大学学長 松田義幸オブザーバー

(物の豊かさから心の豊かさへ)

皆さんに学生時代のことを思い起こしていただくと、これからの私の話に思い当たる節が多々あるのではと思う。先週フィレンツェの神学大学とバチカンのグレゴリア大学、バチカンの文献センターを訪ね、ザビエルや宣教師たちが法王に宛てた手紙・書籍の文献資料の貸し出し計画に協力してくれないか、という話にお付き合いしてきた。

来年か再来年に半世紀をかけたトマス・アクィナス『神学大全』の日本語全訳45巻が完結すると伺っている。その記念行事にできないかということである。そこには、中世末期のスコラ哲学の核心についていろいろな記述がある。また1998年9月14日、人間中心主義の近現代の問題についてヨハネ・パウロⅡ世が「信仰と理性」という回勅を出した。それには信仰と理性を分けてしまったところに物の豊かさを求める幸福観の問題があると書いてある。

そこで幸福観の変遷について振り返ってみたい。「幸福」を「物的消費 (material consumption)」を分子に「欲望 (desire)」を分母にして定式化すると、まず伝統的にはサムエルソンの『経済学』において、社会は必要とする物資をつくり得ないから、とにかく欲望を小さくしなければいけないと書いてある。「勤勉一節約」の倫理である。だから分母を小さくする幸福観が長く続かざるをえなかった (①)。

次に1929年に不況が起こった。そうすると、今度は分子である物的消費を大きくする幸福観でないといけなくなった (②)。それで従来のアダム・スミスの経済学から、ケインズの近代経済学の出番が出て来て、需要を人為的に創らなければならないとされた。ここまではサムエルソンの公式なのだが、③の分子よりも分母を大きいことを前提に分子・分母を拡大する幸福観のことで、大量生産、大量消費、デモンストレーション効果、依存効果という考え方が出てきた。人間中心主義の考え方で資源の制約を考えない③、④の幸福観である。ところが1960年後半辺りから、このまま行かないのではないかというローマクラブなどが唱えた資源制約の問題が出て来た。その後オイルショックが来る。それで日本人の間にも物の豊かさだけを追求する幸福観では危ないという直感が出て来たと思う (⑤)。

日本は、1970年代前半のオイルショック以降、ハイテク産業政策の推進により、重厚長大の重化学工業構造から軽薄短小の省資源型の産業構造に移行して、経済的繁栄を遂げることに成功し、そのために問題の核心を忘れてしまったのではないかと思う。しかし、

日本人はこの長く続くゼロ成長の時代の中でも、物の豊かさから心の豊かさへという気持を再び思い起こしている。こんなに格差社会とか、不景気とか言われていても、日本人の心の習慣、精神の習慣の基調は変わっていない。この問題をどう解釈するかを今日のテーマにさせていただきたい。

(今日のテーマ)

テーマは四つあり、私の思想遍歴を思い起こしながらお話をしたい。

四つとは、①「UNESCOとOECD-CERIの教育理念」、②「MRI訪問（1972. 1）」、③「ポスト産業社会のMental Habit」、④「『新しい人間、新しい社会』への期待」、である。

① UNESCOとOECD-CERIの教育理念

私は大学を卒業してから今日まで全く「ブレ」ずに、これだと考え続けていることがある。それは、TO HAVEの価値からTO BEへの価値の転換ということである。

ユネスコは1972年に、「LEARNING TO BE」を21世紀の教育テーマであると打ち出したのである。記憶されている方もおられると思う。「人間らしく生きることを学ぶ」ということである。このころよく「Quality of Life (QOL)」という言葉が流行った。

それから、この頃月曜日に造った車を買うと、車体の中から「良く見つけたな」という書き込みの紙をいれたコカコーラの瓶が出てきたというジョークが囁かれたことがある。週休2日制や3日制をやると、みんなぼけるのではないかと言われてたりした。そこで「労働の人間化」「労働の質の向上」Work humanization / Quality of Working Life : QWLということが大きな問題になった。これは日本でも「週休3日制は是か非か」と問題にされた。私は、経企庁の下河辺淳氏プランの総合研究開発機構設立の事前調査で、当時日銀の斎藤精一郎氏と一緒にレジャー分野を担当し、調査にあたった。そのときにOECD-CERIで「Recurrent Time Budget」という概念と出会ったのである。これは、「生涯生活時間の柔軟な配分政策」であり、児童期、教育期、労働期、隠遁期という直線型の生涯生活時間の配分制度ではなく、働くこと、学ぶこと、レジャーを楽しむことを各ライフステージに柔軟に組み合わせ配分するかという考え方を示すものであった。

リニアの直線型は子どもの時期5年の後に、12年～16年の教育期があり、そして40年の労働期が続き、隠退ということであった。人生80年、90年の長寿になってきているのに、教育制度は直線型のまま、6・3・3・4制のままでは、異常であると考えられだしていた。技術革新によって、社会変動がものすごく激しいときに、学校で学んだことで用が足りるということはある得ない。OECD-CERIは、「リカレントA」、「リカレントB」の二つのタイプを検討していた。つまり先ほど葛西委員長が言われた基礎教育をたたき込み、その後は現場で働くことと学習することの組み合わせにより、自分の人生を完成に向けることを

柔軟にできるようにするということであった。小林さんという事務総長の次の職責の方がおられて、これからリカレントシステムのことを君たちに考えてほしいと言われた。当時、日本で社会調査をすると圧倒的にリカレントA・Bのタイプを望むという結果が出ていた。このリカレント型に敏感に反応したのがOLたちであった。

例えば、女性は銀行に就職して貯金をして、アメリカにMBAを取りに行き、帰ってから起業する。そのようなタイプの女性たちは自由に能力開発して、現在でも社会において輝いている。女性たちは日本の社会制度の変革を期待しても駄目だから、自分で行きたいところに行き、力を付けてこようと思っていた。これがリカレント型であった。デビット・リースマンは1950年代に「自由時間が増え、レジャー社会が到来する」と言っていた。その後ダニエル・ベルがリースマンを受けて「Post Industrial Societyの到来」と言っていた。これを「脱工業社会」と訳したが、「ポスト（脱）産業社会」と訳すべきだったのではないかと思っている。

この頃、ローマクラブやアスペン研究所に関心のある人は、既に分かっていたことだが、R. Mハッチンスの1968年の「Learning Society」はOECD-CERIの「Recurrent Time Budget」に対応する社会システムであることに気が付いていた。学校教育制度ではなく、社会全体が生涯学習を支援するということである。だから、永瀬委員のやっておられるのは、実は先取りだと思う。機能不全を起こしている直線型の学校教育制度に期待しても限界があり、東進スクールは学習社会全体を視野に入れたLearning Society の先取り事業だと思う。

② MRI訪問（1972. 1）—NIRA立ち上げに向けて—

私たちは先の総合研究開発機構（NIRA）設立に先立って72年1月1日に45日の欧米へのレジャー研究の旅に出てアメリカのカンサスにあるMidwest Research Institute を訪ねた。MRIは、大きなレジャー・プロジェクトを立ち上げていた。社会調査や計量経済モデルで将来レジャー動向予測をしていたのだが、もうひとつ質的なMental Habitのシナリオづくりをやっていた。私たちがMental Habit を説明してほしいと訊ねると、「ある時代、ある社会における人々に支配的なものの見方・考え方・感受性の精神の習慣、心の習慣だ」と応えてくれた。これは美学者のパノフスキーからヒントを得たものであると言っていた。

私は伊勢市の若い人たちとの勉強会をここ20年やっているのだが、あそこに行くとお伊勢さんらしさというのがある。それは、今にできたものではない。奈良に行くとなららしさ、京都に行けば京都らしさがある。鎌倉には鎌倉らしさがある。一体この「らしさ」を創っている源泉は何だろうか。東京らしさというのも現にある。Midwest Research Instituteによると、それをつくり上げているものがMental Habitであり、パノフスキーの事例研究によれば、トマス・アクィナスの中世末期のスコラ哲学のものの見方、考え方、感受性の精神の習慣、心の習慣がゴシック建築様式の総合宗教芸術をつくり上げて、それ

がキリスト教圏の基礎をつくったという話を聞いたのである。

そうすると奈良にも鎌倉にも、奈良らしさ、鎌倉らしさがあり、奈良時代、鎌倉時代の仏教や禅のMental Habitが作り上げたものであり、平安時代の京都の雅もそういうことではないかと思う。従って「らしさ」の根っこの根っこというのはMental Habitであり、それが非常に重要なことだと思ったのである。MRIは私たちの質問に対し、エスキモー、今はイヌイットと言わなければいけないのだが、その例で説明してくれた。あの民族は雪・水・冷たさ・寒さ・色・かたち・硬さ・厚さ、などに関するものの見方、考え方、感受性が非常に豊富である。それは言葉に表れているというのである。南太平洋の常夏の人はそのに来て生きていけない。Mental Habitができていないからである。ベンジャミン・リー・ウォーフという言語学者が、「実在とは言葉の関数である」といっている。我々はこの言葉の中に「精神の習慣」、「心の習慣」があると思うので、そこを質的に研究しているのだと言っていた。先のパノフスキーはラテン語のHabitus Mentalisを使っていた。

この考え方を産業社会の「らしさ」に使ってみると何が見えてくるか。「産業社会のMental Habit」であるが、先ほどの経済学者のサムエルソンの公式に関連づけると「時は金なり」とか、「小人閑居して不善を為す」という諺になる。例えば、我々は働くという言葉については極めて多くの表現を持っている。そして、この言葉の語源には微妙に違う意味がある。

日本の場合を見ても「つとめる」という言葉もたくさんある。この言葉の語源の意味を調べると、元の意味はすべて微妙に違う。そしてそれを二つ重ねている。努力・労働・労力・勉強、みんな「つとめる」という言葉を重ね合わせていて、我々の精神の習慣、心の習慣というのが出来上がっているし、富国強兵の100年に関して言えば徹底的に叩き込まれてきたわけである。

「私たちは働くために生きている」。物の豊かさを追求する。サムエルソンによれば、幸福度は欲望分の物的消費だという。しかし、振り返ってみると、1960年代、70年代は、自由、開放、人間性の回復、自己の探求などを求めて、ヒッピーなどの「Youth Culture」、「Counter Culture」の嵐がアメリカに吹き荒れた時代であった。これに対してアメリカのWASP中心の経営者、指導者たちは「何だ、これは」と大いに迷った。日本の私たちも、学生運動もしたし、プレスリーやポール・アンカなど、いろいろな音楽であの頃を思い起こす。あの頃にジーンズが入ってきて、エスタブリッシュ・カルチャーに対して、そんなものが幸福ではない、と若者が反乱を起したわけである。

1970年にCharles A. Reichが「The Greening of America」を著した。これは、「わけが分からない」というのではなく、これが次のポスト産業社会のMental Habitではないかということを出したのである。今になるとビートルズの歌もそうだし、ウッドストックも「イージーライダー」も「エデンの東」もみんな懐かしい記憶といえるのではないか。そうすると、今の若者たちが駄目だ、駄目だと言わずに、今の若者たちのYouth Culture

の中に、次のGreening of world に向けたMental Habitの芽があるのではないか。それが何だろうと探すことも重要なことではないか。これは先ほど小島委員が言われたこと（世代を超えたコミュニケーションが大切）と重なってくると思う。

アメリカにはスコラ哲学的な自己を超越するものの見方、考え方、感受性のMental Habitの西洋中世社会がなかった。そこに、鈴木大拙がアメリカに禅と日本文化を説きに行かれたのである。アメリカ社会の若者たち中心に禅の思想に反応したのである。若者たちは、「東洋のMental Habit、禅のMental Habit へ」の憧れをもって学び、自己を超越する力、知的力の意志をもらったのではないだろうか。そうすると、「若者たちにとって産業社会で生きること」は、まさに「失業者」、「失楽園社会」ということであった。つまり楽しむという、また人生を人間らしく生きるというMental Habitを全く持たずにいたことへの反乱である。

ここに、私は学問の出発点をおいている。その昔アリストテレスは、「一生懸命働くためにrecreation と amusementを求める」と言っている。つまり労働力の再生のためにrecreationとamusementが必要である。しかし大切なことは「私たちは平和を求めて戦争をするように、レジャーを求めて働く」と言うことである。委員の皆さんは飛行機はビジネス・クラス以上に乗ると思うのだが、実は海外に観光に出かけるエコノミー・クラスに乗っている人がレジャー・クラスなのである。ビジネス・クラスの方は疲れて寝ているか、パソコンで猛烈に仕事をしている。ギリシア語にまでさかのぼると、ビジネス・クラス（アスコリア・クラス）は「多忙階級」のことであり、レジャー・クラスは「有閑階級」（スコーレ・クラス）である。ずっとステイタスの高いクラスである。これでは古代ギリシア人にはさかさまで通用しない。

古代ギリシアのスコレーscholē (leisure) はノーブルでオナラブルな能力を身につける学校（スコレー/スクール）のことである。またビジネス、オペレーションのアスコリアascholia（スコレーの否定形）は仕事に必要で、有用な能力を身に付けることである。こんなことを45日間の旅で学んできたのである。

③ ポスト産業社会のMental Habit —余暇開発センターの設立（1972）—

「佐橋大臣、三木次官」といわれた通産省の佐橋滋事務次官が余暇開発センターをつくるということで、日経の円城寺次郎社長に日経新聞の文化面を、経営者を立派にするのに役立つようにするために、協力するように言われて、当時日銀から立教大学に移っていた斎藤精一郎氏と二人で、理論面の番頭として佐橋理事長の元へ行くことになった。丁度その頃、ミヒャエル・エンデの『モモ』が世界中に翻訳されたのである。

「時間貯蓄こそ幸福への道 時間貯蓄をしてこそ未来がある 君の生活を豊かにするために時間を貯蓄しよう 時間は貴重だ 時は金なり 貯蓄をせよ」。これは産業社会の

Mental Habitだということ、世界中で爆発的に翻訳されたのである。

一方、佐橋理事長は南宋の文天祥の詩をいつも吟じていた。身近な例に譬えると「ゆとりがないと富士山が見えない。ゆとりがあると富士山を見ることができる。二つの関係は似ているようだが似ていない。心を失っているビジネス・クラスはゆとりのあるレジャー・クラスに及ばない」という意味である。忙しくて心を失うというのがbusiness、occupationであるから、産業社会の精神の習慣を形成しても、増大する自由時間に対し豊かなMental Habitと、play技術を持っていなければ「失業者」だということである。

今、人生は90年、100年であるが、当時は人生80年ということ、生涯生活時間に換算して70万時間といていた。「生涯労働時間」が7万時間で人生の1割である。「生涯自由時間」は21~25万時間で人生の3割から4割である。産業社会では、この3割から4割に相当する自由時間の中で、人間らしく生きる心の習慣、精神の習慣を何もつくらないで来たので、定年になると本当にすることがなくなってしまう。奥さんの方は輝き、男性はどうしようもない。こんな異常な社会になぜ気付かなかったのであろうか。

一般に産業社会のMental Habitに従えば、holidayというオフの日であると言うけれど、holy、つまり一番大切な日というのがholidayの語源である。一方、workday というのはproductivity、生産性、能率性を追い求めることで、人間の最も仕事に向くところだけが要求され、研ぎ澄まされる。そのために心を忙しく失ったまま定年を迎えることになる。若いときに一所懸命仕事をしてきた人が定年になり名刺を使えなくなると早く死んでしまうとも言われている。つまり名刺の力で人に会い充実した仕事できていたのに、名刺がなくなるとそのような人にも会えなくなり、生きる張りがなくなってしまう。

アドラー・カールソンという北欧の社会学者の造語であるが、「失業者unemployment」という言葉がある。失業者unemployment のoをaに変えて「失業者」にしたのである。従って先進産業社会は自由時間の増大に対し、失樂園社会だということになる。次々にMental Habitを豊かにするプロセスを省略する文明をつくってきてしまったので、「シグナル・コミュニケーション → シグナル行動 → シグナル人間」となり、深く考える力がなくなってしまった。自由時間に適応する豊かなMental Habitを身に付けるためには「シンボル・コミュニケーション → シンボル行動 → シンボル人間」という、もっと象徴の能力を付ける努力をしなければならない。本当に単純なただ反応するだけの信号機のような人間の集まりになってしまった。そういうところで民主政治制度をとると、今のような社会になってしまう。

しかし、可能性はある。日本人の生活意識をとらえる時系列の世論調査をみても、失われた20年、30年を迎えようとしている状況下にあって、依然として「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」のMental Habitが求められている。生活の中では「レジャー・余暇生活」が何よりも大切である。日本人がこういうことを思っても政府は気が付かないし、文

科省は高校で美術を選択するか、音楽を選択するか、書道を選択するかと、芸術の総合能力を基本教育として身に付けさせるということについて、まったくギブアップしている。

「3世代のMental Habit の変遷」をみると、祖父母の時代は、「勤勉 - 節約」の価値観ではあるが、伝統的価値観や宗教心を持っているからまだ良い。ところが我々の時代（父母の時代）は「所有 - 消費」の価値観で、サムエルソンの公式で生きてきたので、レクリエーションとアミューズメントはあっても能力を必要とする本当の余暇のscholeからは見放されている。若者たちの時代は、「存在 - 自己開発」の価値観であり、若者たちはこのことに気付いてきているのだが、それを支援する社会システム（学習社会）が出来上がっていない。だからフラストレーションが溜まっている。これは見方を変えたヒッピーの時代と同じではないか。

次の「欲望の大きな変化」も、私が日経新聞の日経広告研究所に移った、1960年代前半に作成し、今なお使っているものである。生理的欲求充足は胃袋にはそんなにたくさん入らないし、これ以上入れれば糖尿になる。物質的欲求充足の家にも物を入れる制限の枠があるわけだからそこへ物をどんどん入れれば、家も肥満になり糖尿になってしまう。だから断捨離が必要になる。やはり無限に善きことというのは、精神的な「自己開発欲求」であると思う。しかし、自己を完成する、これに対応する学習支援システムは何もできていない。結局、意識は第3ステージ 脱産業社会、「存在 - 自己開発」倫理に向かっているにもかかわらず、社会システムは第2ステージ 産業社会、「所有 - 消費」倫理でがんじがらめになっていて、このギャップを乗り越えられないでいる。

④ 「新しい人間、新しい社会」への期待

ケインズは、1930年、不況のときに、ちょうど21世紀の現代にあたる孫たちの時代は「経済の問題よりも、人類の永遠の問題であるレジャー問題が重要になるであろう」と言い、その環境をつくらうというので、文化経済学の基礎（有効価値=f（固有価値・享受能力））をこの時代につくった。

ガルブレイスも2003年2月4日の日経新聞で、日本が一番世界に理想モデルを示せる国ではないかと述べている。西洋のMental Habitと東洋のMental Habitの一番良いところを日本人は伝統と歴史の中に持っているので、このことをもっと世界に示して、経済の尺度で測るのではなく、「新しい価値尺度」、教育立国と言ってもよいと思うのだが、そういう時代をつくったらどうかと言っている。

ユネスコは、鈴木大拙と長く共同研究したE. フロムの「To have の価値観からTo beの価値観へ」によって21世紀の教育政策を表現している。また、R. M. ハッチンスは、教養教育がいかに大切か説いている。

東京大学の今道友信先生も、ソクラテスの「人間としての魂の世話を忘れてはならない」

という言葉を引き、教養教育というものがビジネスにとっても人生にとっても大切だと言う。元総長の小宮山宏先生も、東大にある9,000の開設科目をつなぐ、教養の全体知を教えるところが欠落しているとずっと言われていた。

以上のまとめの具体例としては、古典、グレートブックスに学ぶことが大事だということの事例を取り上げておきたい。

先週、高野山大学とフィレンツェの神学大学が催した、声明とグレゴリオ聖歌のフィレンツェの交流会に行ってきた。昔からグレゴリオ聖歌と声明は似ていると言われているが、本当に朗々たるもので似ているのである。

ローマのグレゴリア大学は今でもスコラ哲学、リベラル・アーツ教育、自然科学、社会科学、人文学をきっちり教えている。だからと言って、彼らがカトリック教のMental Habitをこれが一番だと押し付けているわけではない。ここにヨハネ・パウロⅡ世の「信仰と理性」の回勅に非常によく表れていると思う。

(新しい社会へ向けてのMental Habit)

京都大学の上田閑照先生から教えていただいたことなのだが、ポスト産業社会のMental Habitの研究ではどうも東京大学の学術・芸術よりも京都大学の学術・芸術のほうが、これからグローバルに貢献するのではないかと思う。鈴木大拙と西田幾多郎の哲学なのだが、これについて教えていただいたことをかいつまんでお話ししたい。

最初に鈴木大拙。禅の文化は文字では表現できない、「不立文字」と言われている。やはりよいお師匠さんについて修行して習うよりほかない。だから言葉では表現できない。それではどのように伝えればよいのか。アメリカに行ってもどのように伝えるのか。ここで鈴木大拙は苦勞するわけである。

そのときの方法はまず第一級の禅の体験をさせる。パーソナル・エクスペリエンスをさせる。そしてその体験をできるだけ言葉で考えさせる。そして次にその言葉を体系化、思想にさせる。そういうことをしなければ、やはり外国人には伝わらない。「不立文字」ではあるのだけれど、一級の体験したものをできる限り言葉にして、体系化つまり思想にさせる。しかし、体系化するとそれが自分にとってのステレオタイプ、マンネリの壁になり、またそれを他人に押し付けることにもなる。それをぶち壊せ、というのである。そのときに「十牛図」が参考になる。絶えず十牛図で何度もループしながら一級の体験をして言語化、体系化させる。しかしそれにいつまでも依存しない。必ず壊せ。禅とはテーブルをガタガタ動かしてぶち壊しながらより高い体験をさせ続ける。その教科書が十牛図なのである。

インドで始まった禅の思想が中国の儒教・道教と交流し、そして日本に入り、日本の風土でさらにクオリティーが高まった。いつも大拙が言うのは、日本では自然そのものの中

の存在するものすべてに靈性があり、芭蕉が言うように自然を教科書にして、四季の変化を友とするMental Habitがよい。自然そのものを手本にして、そこに靈性を見出す。先ほど葛西委員長が言われた絶対的なものを置くのと、置かないとの違いはあるが、絶対的価値(神)に向けて自己を超越するプロセスについては非常に似ている。西洋のモダンの理性、科学、哲学は、すぐに二つに分けてしまう。物と心、有と無、存在と価値、善と悪、神と人間、聖と俗、本質と現象、美と醜。他方、禅の体験の刹那というのは分かれていない。ところが、西洋の中世末期のスコラ哲学のところまで戻ると、分かれていないのである。近現代の人間中心主義の時代になってから分かれたのである。

西田幾多郎も禅の体験をして、同時に西洋の学問の哲学を探究した。「世界内存在」はハイデガーの言葉であると言われているが、上田先生は「生活世界(人生)」「歴史的世界(歴史的社会的生)」「生死界(境涯)」の3つに分けて西田哲学の背景を語っておられる。最初の「生活世界(人生)」であるが、西田幾多郎はものすごく不幸な人で、奥さんはすぐ亡くなる、子どもも亡くなる、そして金沢の学術風土の高いところに四高ができて、荒っぽい教育だったのでやめるのだが、やはり勉強を続けようとして東大に入る。しかし正規で入っていないため廊下で本を読まなければならないという屈辱的な「生活世界」(人生)であった。次は富国強兵の明治の時代という、「歴史的世界」(歴史的社会的生)。しかし、そういうことがあっても誰からも影響を受けない普遍的な世界を学問的に探究する、それが「生死界」(境涯)である。「境涯」のところで禅の体験をしながら、哲学を探究していく。西田幾多郎自身の「心の場」で、西洋の世界と東洋・日本の世界を突き合わせ、そこで動的に結び付けたうえで「純粹経験の哲学」をつくりあげた。色を見て音を聞く刹那、つまり音そのものになる。色そのものになる。未だ主もなく客もない(主客未分)で、原初世界そのものになる。それから光になりきるというように二つに分ける前の話である。それが「原始原初の純粹経験」である。西洋哲学の近現代の哲学は、二つに分けるくせがある。しかし西田哲学は未分化で分けない。純粹経験というのは未分化の刹那ということなのだが、これは鈴木大拙の説く不立文字に対応している。それをぐるぐる回せという。よい体験をしてまたクオリティーをパワーアップする。このぐるぐる回しが西田哲学をつくり上げていく。これを「自己変容循環」という。

こうした考え方に、アメリカの若者たちが関心を持ち出した。スティーブ・ジョブスなどもその一人だと言ってよいと思う。これは、アメリカには西洋中世社会がなかったからだといわれている。グレゴリア大学などを見ると中世と全く変わっていない研究と教育を今なお続けている。普遍的なものを学び教え、研究している。そこには空間と時間を超えたものが存在している。カトリック大学の人たちは、もっとこのことに自信を抱いて存在感を出せばいいのと思うのだが、大人しいという感じがする。